

改訂

これからの養鶏

飼養管理の技術を中心として

改訂

これからの養鶏

飼養管理の技術を中心として

口 絵

これからの養鶏を考える

鶏群構成とひなの育成が要諦
四月雛の体型に到達することが肝要
秋びな寒びなの性成熟コントロール

著者略歴

明治四十四年愛知県生まれ。昭和二十五年愛知県渥美養鶏組合長、ひきつづき愛知県畜産養鶏農協連合会理事、日本養鶏協会専門委員を歴任。現在、豊橋飼料株式会社取締役。昭和三十六年「①式養鶏法」を完成し発表。昭和三十九年から四十二年までに同方式による総羽数一五万羽の豊橋飼料新城養鶏試験場を設計し完成する。同四十二年より六回にわたって北米、欧州、南米、東南アジアの養鶏事情を視察のため渡航。著書は「これからの養鶏」、「続これからの養鶏」、さらにこれら二冊をまとめ英訳した「Practical Poultry Husbandry」があり、この業界でも異彩を放つ。

改訂 これからの養鶏

定価 3,500 円

昭和51年11月1日 第1版
昭和55年2月1日 第2版
著者 辻 一 夫
発行者 多 喜 栄 一
発行所 鶏 の 研 究 社

東京都千代田区丸ビル623区
電話 東京(03)201-3589
振替口座 東京0-73261

印刷 杜陵印刷株式会社

発刊に當つて

本書の著者辻一夫氏は現在愛知県渥美郡田原町で一万羽の採卵養鶏を經營している。その養鶏場を視察した者が誰でも感銘を受けるのはひなから成鶏までのすべての飼養鶏の状態だと思ふ。ひなは自家育成であるが、その幼雛から大雛までの育成施設に独特のものがある。成鶏舎は開放式ケージ舎であるが、育成舎から成鶏舎まで換氣重点主義の設備であることに氣付く。鶏の状態は実に素晴しく、産卵鶏の如きは其の真紅に輝く肉冠とその活氣と産卵振りに驚かされる。中、大雛は群飼ケージ収容であるが、その發育状態は理想的である。実に氣持よい眺めである。幼雛はここ独特のバッテリー育雛器を使用している。これは実際にその育雛状態を見た者でないとよく判らないだろうが、全く独創式で、その發育振りは申し分ない。

辻氏は自家の養鶏場の他に豊橋飼料株式会社経営の新城養鶏試験場を指導している。ここは産卵鶏一〇万羽余飼育の大規模なもので

あるが、これは辻養鶏場の延長で、その設備も飼育法も全く同一で、規模が大きいだけの違いである。しかも、飼育鶏の状態は規模の大小にかかわらず少しも變りがない。

このような鶏の状態は他の養鶏場ではあまり見受けられないが、これには基礎的な条件があるに違いない。その變つたところは辻氏が戦前から戦後にかけて種鶏家であつたことであろう。愛知県に於て当時全国的に知られた幾多の多産記録鶏を作出している。種鶏家は毎日トラップネストで種鶏を一羽一羽手で取扱いながら産卵性能を調査していた。だから鶏の多産生理をよく研究し、よく知っている。栄養生理についても同様である。そこでこれらの体験が現在の採卵鶏の飼育管理に徹底的に応用されている。環境条件からの空氣の問題、育成ケージの施設などにも幼雛バッテリーの構造、管理にも鶏の生理重点主義で買かれてゐる。

「鶏の研究」誌はこの辻氏の養鶏法を広く全

国くにの養鶏家ようけいけに知らせようと思ひ、辻氏つじしにその公開こうかいを乞こうたところ快諾くわいだくを得たので、昭和十四年十二月から、辻養鶏場つじようけいばうにおける育雛いくちうから成鶏管理せいけいかんりまでを詳細に講述して貰ひ、それを連載した。この記事に対する読者の反響は物凄ものすごかった。それから現在まで辻氏の講述は尽つきることがなく貴重な宝庫ほうことなった。最近に行つた読者のアンケート調査けんくわでも、一番役に立ち毎号欠かさず読む記事として、これが圧倒的に多数を占めている。

本書は最近記述きじゆされた実践的精密養鶏の技術の中心点となるひなの育成と鶏群構成と、それを実践して成功している事例を集録したもので、これはこれからの養鶏の核心をなすものである。すでに雑誌で読まれた読者にもまた全部を通読する機会を逸した読者にも、これを知らなかった他の養鶏家にも、まとめて読める機会が提供された。

わが国の養鶏産業はすでに成熟期に達していると思われる。鶏卵の生産量もその消費量も世界の最高である。しかし、その生産基盤は弱体で狭小な国土の上に全面的輸入飼料に

支えられている。ただ一つの強味は一億を超える大きな消費人口と世界に冠たる経済力である。だが、鶏卵の消費には限界がある。

だから、限られた消費に対し、生産者同士の争いが起きる。自由経済のもとでは優勝劣敗が原則である。産業の成長時代は競つて生産規模を拡大しても相克はなかったが、これからは違ふ。一方の拡大は他方の縮小を強要する。このため大規模少戸数の養鶏家によって養鶏産業が占拠されるようになる。この傾向はわが国でも年々強くなっている。

そこで生き残る競争が激しくなる。ここで生き残るには経営の強化あるのみである。ではどのようにして強化するか。本書はこの戦いに勝ち抜くための武器だといつてよい。ここに記述されている辻氏の養鶏法を実践する養鶏家はいずれも厳しい経営環境の中でもよく繁栄への道を歩いている。戦いの前によき武器を備えよ。本書はこれからの生存競争に對するよき武器である。敢えて本書を意欲に燃える養鶏家へ推奨する所以である。

昭和五十一年十月

株式会社鶏の研究社
取締役社長 山中 潔



はじめに

「これからの養鶏」を考えるに当って、まず現状の養鶏産業のおかれている環境が、どのようなものであるかをよく分析してみる必要があると思う。とくにここ十数年の間に、わが国養鶏産業の生産基盤が急速に拡大されてきた背景、そしてその結果としての現状の姿、さらにそこから導き出される将来の展望といった線に沿って考えなければならぬ。このことは生産の担い手であるわれわれのみならず、関連業界も含めて全体の問題であり、将来に向かって養鶏産業の健全な発展を推進する上で、個々にその責任も分担するものでなければならない。

わが国養鶏産業の現況は、鶏卵の産出量において今やアメリカ、中国、ソ連に次いで世界第四位にのし上がったが、十五年前の昭和三十六年にはまだ成鶏羽数も五千万羽台、鶏卵の年間生産量も一〇〇万ト以下であった。これより四十五、六年までの十年間が急成長期である。成鶏羽数が一億二千万羽台、年間鶏卵生産量が一八〇万ト台へと乗ったのは四十六年、これより以降は五年を経過する、少なくとも五十一年まで、この水準を下回って経過した。羽数、鶏卵生産量ともに四十六年をピークにして完全に足踏み状態にあることをどのように見るべきであろうか。四十六年までの急激な羽数、鶏卵生産量の増加は、個

個の養鶏家に規模拡大が競って行われたことを示しており、事実、農林省の統計によっても羽数の階層分化が著しく進行している。しかし、四十六年以降は一部の無謀な増羽を除いて、養鶏家の規模拡大は否応なく終止符をうったといえるのではないか。現状では生産過剰が底流にあり、農林省の指導する生産調整に対して業界輿論も高まりつつあるため、客観情勢からいっても最早や規模拡大は出来なくなってきた。しかし、それよりも実態は、過去の規模拡大が省力・機械化の試行錯誤を母胎としてきたため、生産性に極めて弱く過去のような利益をあげることができなくなってきた。それがブレイキになってきたことを否定できないだろう。

このことについてアメリカの養鶏産業がたどってきた道を思いおこしてもらいたい。消費の動きに重きをおくよりも生産競争が先行して、過去の成鶏羽数が三億五千万羽まで増加したが、一人当り年間消費量が四〇三個という記録を頂点にして年々減少し、一九七五年には二七四個になり、成鶏羽数は一九七六年六月時点で約二億七千万羽まで減少してしまった。資源（飼料用穀物など）が世界でトップの国においてすら、消費を無視した生産は存続できないという厳然たる事実である。これをみれば、わが国も同じ道をたどること

が目に見えている。すでに、ここ数年はその傾向にある。無謀な増羽拡大が許されるべきでないことが、これら内外二つの事実によっても明白である。

端的にいうなら、こうした事態を予想するとき、生き残るのは誰かということである。いま、アメリカに生き残る養鶏家はコストダウンを限界まで追求し、その競争のなかで残った。わが国の場合には、これから将来に向かってどのようなするか、この先例にならって発想の転換をしなければならないと思う。そうした観点に立って、まず、自分の足もとを見つめ、原点にかえる必要がある。それには適正規模を旨とし、自ら育雛を行い、産む鶏をつくり、生産態勢をつくることである。安定した生産と消費者への供給を行う。ところが、いま最も問われているのは、羽数こそ万単位あるいは十万単位になりこそすれ、この基本的な態勢が全くゼロに等しいことだ。鶏をつくる技術を軽視してきた結果である。私がこれまで体験してきた数多くの大型養鶏の経営・技術指導、あるいは再建を通していえることは、技術を軽視して省力化を優先し

たいまの養鶏構造をバラバラに解体し、技術をより重視した生産態勢につくりかえることしかない。そのなかで最も焦点となるのが、ひなの育成技術と鶏群構成である。経営にはそれなりの生産基盤が必要であるが、生存率の低いときには安定した成鶏の鶏群構成が保持できず、一定した生産維持ができない。それらの諸々の問題全てが、軽視されてきたひなの育成技術に帰着するのである。私の提唱するこの問題が、具体的実践の場でそれぞれ優秀な成績をあげ実証するところとなったため、「鶏の研究」誌がこれを取り上げ、十数回にわたり連載、報道した。これからの養鶏がそこから始まる。飼養管理を中心とする技術、それがこの二つの問題に集約される。多年の研究と試験から導いたこの二つの理論と実践方法を詳述したが、反響が余りにも多いためこの「鶏の研究」誌が連載したものをより多くの養鶏家に十分活用できるように、ここで一冊にまとめ収録した次第である。これからの養鶏に対する指針として、本書を参考活用しその糧としていただければ幸いである。

改訂に當つて

初版刊行後、三年を経過した。この間、著者はさらに数多くの試験研究に殆んど年月を費した。それらの結果を通じて本書で提起

した問題をもう一步突っ込んで追求してみると、どこまでも根底にあるのは給餌の技術である。すでに、本書第Ⅱ部において鶏一生を通じた制限給餌の必要性、ならびにその具体的方法を詳述してあるが、改めてもう一度、経営の観点に立ってひなの育成を考えてみれば、性成熟に達するまでの制限給餌のあり方に重要な問題のあることがわかった。すなわち、年間通じての一定した鶏卵の生産と出荷さらにこれを可能にする鶏群構成、そしてその維持のためのひなの周年育成、これが経営の基本的構造である。しかしながら、育成する季節によってひなの性成熟が異なり、これが生存率、産卵性にも異なる結果をもたらすため

一定の生産・出荷が可能にならない。この原因はひなの育成期の季節の自然条件に飼料の摂取量が影響を受けることによつてゐる。

しかし、どの季節に育成した鶏群も標準の春四月孵化の鶏群と同じような性成熟、同じような生存率と産卵性を得ることが必要である。そこで本書の制限給餌理論をさらに展開して、この三年間実験を積み重ねた結果、周年育成における季節別制限給餌方式がようやく完成を見るにいたった。本書第二版改訂の主要な部分がこれで、第Ⅱ部第三章に新しく加えてある。さらにこれを理解しやすいよう口絵も新たにカラーとした。いづれにしても周年育成が普及し、養鶏に産業としての近代化が芽生えて久しいが、ここで本書の新しい制限給餌方式により真の近代的経営を確立されるよう希つてやまない。

昭和五十五年一月

著者

目次

発刊に当って
はじめに
改訂に当って

第Ⅰ部 鶏群構成の技術

第一章 鶏卵生産を左右する鶏群構成のすべて

- 1 大規模羽数ほど低い生産効率..... 3
- 2 コンスタントな生産が基本..... 4
- 3 バランスの悪い鶏群構成の欠陥..... 6
- 4 鶏群構成に対する基本的な考え方..... 8
- 5 コンスタントかつ最大^{同時}の生産になる鶏群構成..... 9

第二章 鶏の能力を見直し鶏群構成をつくる

- 1 鶏の能力を見直す..... 11_{生産力}
- ①育成率に限界はない..... 11
- ②波及的につづく残存率..... 13
- ③産卵能力はどこまであるか..... 15
- 2 実際例にみる鶏群構成と産卵のバランス..... 21
- 3 新城の卵はなぜ高いか..... 22

第三章 鶏群構成をつくるポイントと最大生産量の追求……………25

1 標準的な鶏群構成のつくり方……………25

①一定量生産のための隔月均等育雛……………26

②隔月均等育雛の利点……………27

2 育成設備の十分な保持と更新率……………32

3 大雛設備のダブル方式の意義とその活用……………33

4 コンスタントかつ最大生産量……………36

第Ⅱ部 飼料給与の技術……………39

第一章 採卵鶏の一生を通じた新しい制限給餌の考え方……………41

1 飼料給与に対する考え方……………41

2 問われぬ給餌技術……………43

①生産性追求の重要なファクター……………43

②実情はエサのやり過ぎと浪費……………44

③給餌技術ゼロの省力化の問題……………46

3 新しい制限給餌発想の背景……………48

①ブロイラー種鶏にはじまった制限給餌とその進展……………48

②ブロイラー種鶏における制限給餌の考え方……………49

③採卵鶏制限給餌法の出発点……………51

第二章 採卵鶏の一生を通じた制限給餌新体系……………53

1	制限給餌の真の效果	53
---	-----------	----

① どのような鶏をつくるかが最大の眼目

② 四月雛、六月雛にみる産卵開始状況とピーク

(1) 生存率 (2) 産卵の上昇 (3) 卵重量

2 制限給餌新体系の概要

① 発育生理、繁殖生理を基礎とした育雛・育成期の制限給餌

(1) 幼雛・産温期の制限給餌 (2) 大雛期における制限給餌

② 性成熟期における制限給餌

(1) 性成熟期の脂肪沈着と過肥の影響 (2) 性成熟期における制限給餌

(3) 制限給餌のもうひとつの狙い

③ 成鶏舎移動時の制限給餌と若めすのデビーク

(1) 成鶏舎移動収容は体躯の充実と性成熟の一致が基本

(2) 移動後の制限給餌と環境への適応 (3) 移動後のデビーク

④ 産卵ピークへ向かつての制限給餌

⑤ 産卵ピーク経過後オールアウトまでの制限給餌

(1) 産卵ピーク経過後の産卵と飼料摂取 (2) 産卵ピーク経過後オールアウトまでの制限給餌

第三章 コンスタントな生産をベースにした周年育成の新しい制限給餌方式

1 ひなの育成期における制限給餌の新たな展開

① コンスタントな鶏卵生産のための周年育成

(1) バランスある鶏群構成の維持 (2) 年間平均して一定した成鶏の補充更新 (3) 隔月均

等羽数の育雛方式による周年育成 (4)同じような鶏を育成することが重要な条件

②周年育成における問題点.....81

③ひなの育成期における制限給餌理論の新たな展開.....82

2 理想的な発育と性成熟到達時期.....85

①四月びなを基準とする理由.....85

②標準とする四月びなの発育と性成熟.....87

3 秋びな、寒びなの育成期における新しい制限給餌方式.....91

①対象とするひなの発生時期.....91

②九ゝ二月孵化びなの育成期における給餌量の設定.....93

(1)大雛舎移動前二週間の給餌量 (2)大雛舎移動収容後の制限給餌

(3)制限の解除とその後の増量方法

③制限給餌下での重要な管理事項.....96

(1)給餌スペースの問題 (2)給餌のトレーニング (3)原則となる一群羽数

(4)適切なデビーク

4 季節を考慮した周年育成の新しい制限給餌方式.....99

①三ゝ八月孵化びなの週齢別給餌量基準.....100

②九ゝ二月孵化びなの週齢別給餌量基準.....101

③制限給餌理論の新しい展開による効果と意義.....102

(1)春びな、夏びな方式の実際と効果 (2)秋びな、寒びな方式の実際と効果

(3)周年育成における給餌技術の意義

第I部

鶏群構成の技術

第一章

鶏卵生産を左右する鶏群構成のすべて

1 大規模羽数ほど低い生産効率

養鶏経営のひとつの指標に一羽平均産卵日量をあらわす方法があるが、それは多くの養鶏家で四五羽産んでいるとか、五〇羽産卵が自分の目標であるとか、ごく簡便に口にはるるに成績をあらわすひとつの目安になっている。そしてそれがその養鶏場の生産性、ひいては経営内容をあらわす尺度と考えているふしもある。しかし、経営に關与する他の技術的な要因、たとえばひなの育成率、成鶏の残存率、さらに更新率、鶏舎稼働率などの飼料要求率など相互の補完關係がどのようになっているかが問題で、単にそれだけで経営がよいとは断定できないし、一羽平均産卵日量が高いからといって自己満足や安心することはできない。ところがこれらの他の要因がどの程度におさまられてこれだけの産卵日量を出している

のかということになると、甚だ矛盾した数値かあるいは極めて曖昧な答しか返つてこない。これらの技術的な要因がひとつひとつ、妥当な水準におさまられているかどうかが問題であるが、それより以前に、もっと驚くべきことがある。たとえば自分の養鶏場で現在何羽もっているのか、正確な成鶏羽数を即答できるところは極めて稀だということである。まして月齡別の鶏群構成が正確にどのような状態にあるのかという点になれば、なおさらわからないのが普通である。したがって、養鶏家の多くは、現状をおまかに何羽の成鶏がいて、今日は何の卵が出たという程度のドンブリ勘定の域にとどまっているに過ぎない。経営規模が五万羽あるいは一〇万羽という企業養鶏においてすらこれが一般的な実情である。

そこで主題の鶏群構成の問題に入る前に、養鶏経営における生産性ということに對してもなお少しふれ、反省の材料としておきたい。

生産性というのは、業種を問わず労働や資本などの使用量に對して得られた生産量の度合いである。養鶏においてはこれまで飼養規模の拡大がまず労働生産性をアップし、それがコストダウンの主流になると考えていた。計算上、鶏のもつ産卵能力を固定して単純に一人当りの持羽数だけを増大させれば、確かに労働生産性はアップすることになる。過去においてこの考え方が省力化を生み、その担い手が大型の機械化鶏舎になったのである。ところが今日における少なくとも万単位規模の養鶏経営では現実にそのような結果は生まれてこず、ごく少数の例外を除けば一様に低生産に悩んでいる。そして、従業者一人当りの持羽数が増加しているのに、労働生産性指数が逆に低下している。生産コストが急上昇した

四十八年以降、経営危機を訴えるところが多かったのもこれを表わしているのであり、その理由は鶏の能力発揮の欠如によるものだということが、ようやく論議の的になってきた。それは過去の増羽において、誤った人間本位の省力化だけが追求され、飼養管理の基本的技術を軽視したことによるものであり、鶏が生き物だということを忘れた結果に他ならないと思う。一羽平均産卵日量が四五羽や五〇羽を出すために更新率が一〇〇%をこえ、成鶏設備の稼働率が絶えず八〇%以下であったり、逆に羽数を維持しようとして老鶏、強制換羽鶏を相当数抱えたがため、産卵量の低下に甘んじざるを得ないというケースであったりするのは、このようなことが原因になっていると思う。飼養規模拡大過程の後半は利益が少ないために持羽数でカバーするいき方の増羽が多かったように見受けられるし、聞けば大型養鶏の何割かはそのように答えている。いわゆる自転車操業の始まり

鶏をみる筆者右から2人目



である。薄い利益の上に経営を存続できたかもしれないが、四十八年以降の物価や賃金の騰貴と金融引き締めによって、このささやかな利益はひとたまりもなくけし飛んでしまったといえるだろう。

大事なことは、かりに五万羽だとか、一〇万羽だとかいっても、やはり個の集合体である以上、一羽一羽の産卵成績があがらなければ収益はおぼつかなくなり、経営維持はできなくなるのだ。莫大な投資もこれをベイする生産がなければ、存続できなくなるのは当然で、これ

は経済の鉄則である。しかし、それがやっつてこれたのは、系統や商社の支援があったからだといっても大きな間違いではないだろう。したがって、養鶏業がこのような環境におかれていたことは脆弱、放漫な経営態度を醸造したに過ぎない。

このようにいうと、それは極論であるとの批判が出るかもしれない。そこで個人のことにしても断っておく必要がある。私自身は五十年余りの養鶏経験があり、現在も一萬羽の養鶏家である。また、幸か不幸か一飼料会社の役員をして

いる関係上、全国のいたるところに足を運び数多くの養鶏家と接触してきた。そして要請されて小は数千羽から、大は数十万羽規模の養鶏場まで多くの技術・経営指導をやってきた。最近の数年間には単なる技術や経営へのアドバイスの領域をこえ、相談して大抵の事例では経営の再建策という差し迫った問題に遭遇している。つまり、これらの体験のなかから以上のことがいえると確信してい

る。したがって、大羽数規模の経営ほど鶏の能力発揮が欠如しているという現実をまず考えなければならぬが、当面こ

2 コンスタントな生産が基本

の低生産を如実にあらわす鶏群構成という問題を、以下、技術・経営両面から取り上げてみたい。

鶏卵生産を目的とする採卵養鶏は鶏のもつ産卵能力をフルに発揮させ、しかも四季問わずコンスタントな生産・出荷を可能にするような鶏群構成をつくり維持することである。しかし、現実にはこれができない。数年前、オールイン・オールアウトを採用、育成センターを核にして新しい養鶏団地をつくったところが各地にあるが、現状ではこのシステムが殆んど放棄され、強制換羽が完全に定着しているのをみればよくわかるだろう。また不況になればいつでも取沙汰されるのが卵価の予測である。しかし、この見通しは的確に当たったためしはない。まして卵価のコントロールは養鶏家の手の及ぶところではないから、四季を問わずいかにコンスタントに生産・出荷するかは、養鶏経営のあくまで基本とするところである。どのような製造業であっても、今月は一〇〇の製品ができ、来月は八〇しかできないということであっては、企業として成り立たない。

このように鶏卵のコンスタントな生産は、経営の安定化に基本条件として重大な役割をもつが、さらにもうひとつ、鶏

卵を供給する生産者という立場からみて、社会的に道義的な責任をもつ。すでに国民の食生活の上で鶏卵はタンパク食品としての重要な役割を果たしており、食品のなかでの位置づけも近年とみに高まっている。一方、消費はようやく飽和点に達しつつあり、買手市場化した。つまり、このような状況にあつては、自分も儲けるが消費者にも迷惑をかけないという生産が要求される。また買い控えムード、景気後退という経済のなかから適量生産、合理的消費の新しい考え方が台頭してきている。これらの諸点と、毎日欠かすことのできない生鮮食品という性格をあわせて考えれば、鶏卵をコンスタントに供給する責任が生産者にあるのだということがわかるだろう。

以上、コンスタントな生産に対する理由を二つ挙げたが、もしこれを無視したらどうなるだろうか。ある季節には生産が落ち込み、また別の季節には生産が急増して市場へ卵が溢れる。これでは養鶏家の経営自体に安定を欠くばかりではなく、消費者にとっても甚だ迷惑な話である。時によってこれが極端におければ卵

第1表 採卵用ひな餌付け季節指数

月	年次	47年	48年	49年	50年
1		85.5	91.7	82.0	84.3
2		114.5	116.0	112.1	105.4
3		151.7	152.7	144.7	141.3
4		140.2	137.2	134.6	142.9
5		127.2	129.2	133.6	138.5
6		98.7	105.7	96.9	102.4
7		77.0	78.4	78.3	83.2
8		79.6	79.4	75.2	77.2
9		86.0	83.1	80.9	88.2
10		85.2	87.1	86.1	90.4
11		83.4	77.3	75.2	76.7
12		71.1	62.0	66.6	69.5
月平均 餌付け羽数		100	100	100	100
年間餌付 け羽数		118,456	115,962	106,393	108,621

注1. 季節指数は月平均餌付け羽数を100としてあらわした。

注2. 年間餌付け羽数の単位は1,000羽。

第2表 全国鶏卵生産量季節指数

月	年次	47年	48年	49年	50年
1		95.6	96.7	97.3	97.4
2		92.4	90.7	91.5	89.1
3		101.6	101.0	102.0	99.7
4		101.0	101.5	102.6	101.2
5		105.5	107.0	107.1	105.0
6		100.7	103.3	101.9	100.2
7		100.1	101.0	101.7	100.3
8		99.0	99.2	98.4	97.0
9		98.5	97.7	97.6	99.2
10		102.5	103.1	102.4	105.0
11		101.4	99.7	99.1	101.6
12		101.8	99.2	98.5	104.3
月平均		100	100	100	100
年間生産量		1,794,076	1,805,193	1,803,565	1,787,899

注1. 季節指数は全国鶏卵生産量月平均を100として計算した。

注2. 年間生産量単位はトン。

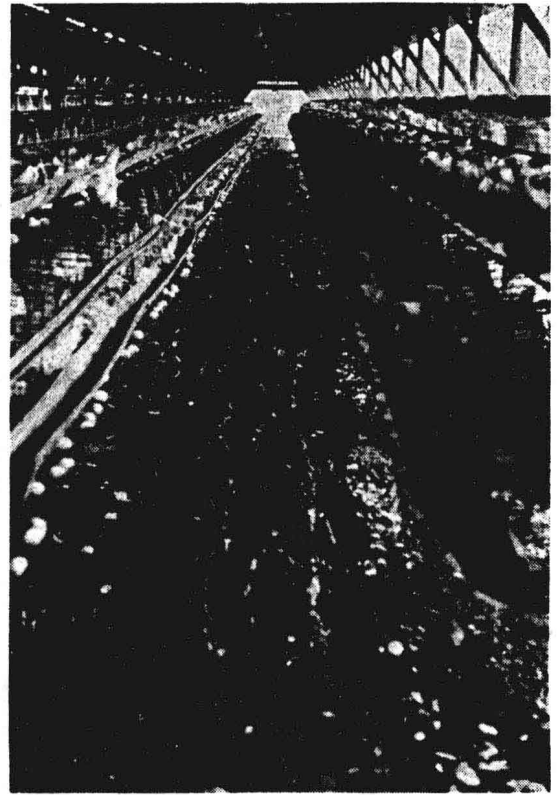
例年は三〜五月の餌付けが集中的に行われている。六月以降は急減するが九月十月に若干の秋びな育雛が行われている。四十九年には第1表の季節指数にあらわれていないが、餌付け意欲が後退したため春びな、秋びなのいずれも餌付け羽数が減少した。しかし、こうしたなかで餌付け減少見通しから逆に集中的にここで育雛する例も一部にみられた。それから養鶏家では秋から年末にかけての卵価を十分に意識した上で行動していることは明らかである。しかし、ひな購入の資金繰りや育成設備および技術上の問題があつて春の育雛を見送った養鶏家では、いきおい老鶏のウエイトが高まり強制換羽が盛んに行われた。その動きは第2表の全国鶏卵生産量季節指数、第3表の卵価季節指数をみればよくわかる。

すなわち、ここ数年は十二月の高値を狙つて六〜八月に強制換羽を集中的に行う傾向が一層強くなつており、市場入荷量の急減を反映して九月の卵価が年末高値を凌駕するような水準までせり上がってきている。第3表で四十八年、四十九年と逐次この傾向をあらわしている。

しかし、六月の早い強制換羽は十二月高値まで産卵の維持が困難であり、八、九月の強制換羽も年を越して厳寒期にさしかかってくるとやはり産卵の維持が難しくなる。現実には五十年三月を中心とした前後三ヵ月間の卵価がかつてなかつたヤマ場をつくるという現象は、強制換羽

の暴騰、暴落は勿論、消費の減退をひきおこす。しかし、反省しなければならぬことはすでにそのような傾向が現実にもみられることだ。近くは昭和四十九年の後半から同五十年前半にかけて需給が

しまり卵価が暴騰、これに刺激されたひなの餌付け急増で同年後半から翌五十年まで生産が増加し、卵価を長期にわたって引き上げてしまったのも、このことを如実に示している。事実、この昭和四十



羽数だけ余計に飼ったが……

九年秋、私が各地の養鶏場を見たかぎりでは、強制換羽鶏を含む老鶏の比率が非常に高かった。逆に若めすを含む当歳鶏の比率が異常に高いところも一部に見られた。年末の高卵価に照準を合わせた若めすの編成や、それが不可能であつた養鶏場において強制換羽鶏を多くもつた結果である。こうして四十九年は期待された四百円の年末相場が不発に終り、かわつて強制換羽鶏の産卵が落ちてきた五十年二月に卵価は暴騰した。これをみて自分だけが儲けるという考え方は当たらないことを示しているではないか。こうしたいき方は養鶏家は勿論、業界全体の健全な発展のためにも益するところがない。そこでむしろマイナスだということを養鶏家がつと自覚するために、若干の資料をもとに具体的に説明しよう。

第1表は採卵用ひなの餌付けを季節指

数であらわしたものである。

例年は三〜五月の餌付けが集中的に行われている。六月以降は急減するが九月十月に若干の秋びな育雛が行われている。四十九年には第1表の季節指数にあらわれていないが、餌付け意欲が後退したため春びな、秋びなのいずれも餌付け羽数が減少した。しかし、こうしたなかで餌付け減少見通しから逆に集中的にここで育雛する例も一部にみられた。それから養鶏家では秋から年末にかけての卵価を十分に意識した上で行動していることは明らかである。しかし、ひな購入の資金繰りや育成設備および技術上の問題があつて春の育雛を見送った養鶏家では、いきおい老鶏のウエイトが高まり強制換羽が盛んに行われた。その動きは第2表の全国鶏卵生産量季節指数、第3表の卵価季節指数をみればよくわかる。

すなわち、ここ数年は十二月の高値を狙つて六〜八月に強制換羽を集中的に行う傾向が一層強くなつており、市場入荷量の急減を反映して九月の卵価が年末高値を凌駕するような水準までせり上がってきている。第3表で四十八年、四十九年と逐次この傾向をあらわしている。

しかし、六月の早い強制換羽は十二月高値まで産卵の維持が困難であり、八、九月の強制換羽も年を越して厳寒期にさしかかってくるとやはり産卵の維持が難しくなる。現実には五十年三月を中心とした前後三ヵ月間の卵価がかつてなかつたヤマ場をつくるという現象は、強制換羽